

2023年8月18日有馬富士山麓で観察した植物

作；岡田弘

アキノタムラソウ(秋田村草) シソ科アキギリ属＊花期＝7～11月

名前の由来＝定かではないが、一説によると、小さな花が連なって咲くその姿が、古くにいわれていた集合した「軍隊（タムラ）」の様に見えることから「タムラ」と付けられ、秋に咲いているので「アキノ」と名が付けられた、といういわれもあります。日本原産の多年草で山形県以西～九州に分布、シソ科の特徴で茎は四角、葉は3出複葉や羽状、まれに単葉もある、対生、夏にサルビアに似た唇形の花を穂状に咲かせる。花色は青みがかった淡い紫色です。林縁、道端などに咲いている、今回も池まで行く途中の林縁に多く見られた。**＊花言葉**＝素直・穏やか。
＊タムラソウと言うキク科のアザミに似た花を咲かせる植物がありますが、まったく別種です。



ナツズイセン（夏水仙）ヒガンバナ科ヒガンバナ属

名前の由来＝春に水仙に似た葉を茂らせて、真夏に花が咲くので、園芸種です、リコリス・スプレングルとリコリス・ストラシネの交雑種と言われています。彼岸花と同じく、葉は花を見ず、花は葉を見ず、です、別名、多く有り、ハダカユリ、ケイセイバナ、ツツラ等々多数、**＊花言葉**＝深い思いやり・あなたの為なら何でもします、楽しむ、悲しい思い出**＊花期**＝8～9月



タカサゴユリ（高砂百合）ユリ科ユリ属・別名タイワンユリ・ホソバテッポウ

名前の由来＝琉球語で台湾を意味する「タカサング」に由来、又、台湾を意味する古語である高砂国に由来する、原産地の台湾では「台湾百合」「高砂百合」と呼ばれている。大正12年に観賞用としてはいった、花は長さが15～20cmラッパ状で外側に薄紫色の筋がある、真っ白もある花弁は6枚葉は松葉の様に細い、球根で花を咲かせるが、連作障害に弱く同じ場所では細菌が発生して枯れてしまう、一つの花から約一千個の種を飛ばし他の場所で2年ほどかけて花を咲かせる、百合は世界には約百種類、15種類日本に自生、7種類は日本の固有種、タカサゴユリは繁殖力が強いので、すでにヤマユリ、オニユリとの交雑種が出来ているので積極的な栽培は控えるべきです、**百合の花言葉**＝純潔・無垢・威厳、等



エゴノキ（えごの木）エゴノキ科エゴノキ属＊花期＝5～6月

名前の由来＝エゴノキの果皮にはエゴサポニンと言う毒が含まれており食べるとエグイことから「エグイ木」となり、それが転じて「エゴノキ」となった。落葉小高木で葉は卵形、互生で低い鋸歯がある、花は下向きに咲く、果皮に含まれるエゴサポニンは昔洗濯に使われていた、又、水溜まりにいる魚とりにも使っていた、材は玩具、櫛、将棋の駒に、枝先にはエゴの猫足と呼ばれる虫こぶが出来、万葉集には山萵苣（ヤマチサ）の名で出ている、世界には約130種ある**＊花言葉**＝壮大



ヤマボウシ（山法師）ミズキ科サンシュユ属（ヤマボウシ属）花期5～7月

名前の由来＝中心に多数の花が集まる頭状の花序を法師（僧兵）の坊主頭に見立て花びらに見える総苞片を白い頭巾に見立て「山に咲く法師」（山法師）を意味するといわれている。別名でヤマグワ、ヤマボウ等多く有る、落葉中高木で5～10m成木の幹は灰褐色で不規則に剥がれて濃淡のある斑模様、剥がれた痕は薄い赤色、葉は対生卵状楕円形で先が尖り全縁、白色に見える花弁は総苞片で4枚、その中心に花序、淡黄緑色の小さい目立たない花が球状になって20～40個球状に密集している、果期＝9～10月集合果で赤く熟し粘液性で甘味があり美味しい、秋の低山を歩く楽しみの一つでした。焼酎に漬けても良い、**＊花言葉**＝友情



ウリカエデ（瓜楓）ムクロジ科カエデ属＊花期＝4～5月

名前の由来＝樹皮につく緑色のまだら模様がウリの実の色に似ているので。別名でメウリノキ・メウリカエデ・オオバノウリカエデ、落葉小低木雌雄異株葉は対生掌状、浅く3裂又は単葉、葉先は穂状にのびる**＊花言葉**＝とっておき・遠慮・控えめ



シマトネリコ（島十練子）モクセイ科トネリコ属＊花期5～7月

名前の由来＝沖縄諸島に生えているのでシマ、トネリコは樹皮に着く虫が分泌する蠟を戸の溝に塗り滑りを良くすることを「トヌルキ」と言います、それが訛って「トネリコ」になった説、別の説もある、葉は羽状複葉、常緑、**＊花言葉**＝偉大・荘厳・高潔・服従

